

熊倉論考へのコメント

北川 泰三

熊倉さんから寄せられた論考は、「とかいなか」からの提案ということで、都道府県単位で見た場合の都会エリアと隣接する田舎エリアとして捉えての北関東の自立発展可能性の考察（企業版ふるさと納税の活用、BCP のパートナー、多民化による産業育成）でした。

首都圏は私にとって土地勘もあり理解しやすいのですが、関西圏や福岡圏だとどのような展開になるのか興味が湧いてきます。福岡圏の場合は、大分や熊本ではなく、中国地方の山口、島根という広がりになるあたりの考察を期待したい。

巷で言われている「とかいなか」は、故森永卓郎（たまたま同年齢）さんが、まちの利便性と自然が残るエリアという、いわば人間居住のいいとこ取りの空間として提起されたものと理解している。彼は、1985 年、都会（川崎市溝口）から埼玉県所沢市に居を移し、実践的なトカイナカ生活を続けてきた。安い物価、戸建ての広い家、農的くらしの実現である。首都圏であれば都心から半径 50km 圏内を目安として提唱された。首都圏計画で言えば、近郊整備地帯に位置づけられるエリアと言えるだろう。熊倉さんの住む高崎や私の実家のある深谷は、都市開発区域と位置づけられ、首都圏に従属しない都市の発展を期待されているとも言える。

「とかいなか」は、二地域居住（彼は平日は都心、週末のみ所沢）という捉え方もできるし、バックオフィスができたところでもあった。「とかいなか」は、捉え方により見え方が変わるし、ロケーションも必ずしも限定されずに成り立つ居住空間だ。90 年代からは、新幹線通勤も増えてきて 50km 圏を越えた高崎でも「とかいなか」化してきた。むしろ当事者のライフスタイルを実現しやすい場所を指す象徴として捉えるならば、エリアはさらに広がり、豊かな暮らしを実現できる可能性ある用語として理解してみたい。